

2020/08/09

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑩

『霊とまことによる礼拝とは』 ヨハネ 4:20-24

■いつどこで礼拝すればよいか

イエス様がサマリヤの女性と話をしている時、彼女はこのような言いました。

「私たちの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。」(ヨハネ 4:20)

イエス様はこの質問に対して「霊とまことによる礼拝は、形式を守ることよりも真心から捧げることが大切だ」と教えておられます。

「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」

(ヨハネ 4:23-24)

今も昔も、礼拝とは決まった場所であるものだという考え方があり、多くの方が「礼拝＝教会に行くこと」という感覚を持っています。それは、私たちが決まった形を守っていると安心するという習性を持っているからです。その習性は、正しい行いをする事で自分は正しい人間であることを証しするという「行いの義」から来ています。つまり、礼拝が自己アピールの場になってしまっているのです。

しかし、キリスト教における礼拝の本質は、神の呼びかけに応答することであって、主役は神様です。神は私たちを助けると言っておられるのですから、神の前にひざまずき、「助けてください」と応答すること、それが礼拝です。神は24時間私たちに呼びかけておられますから、私たちは、場所も時間も関係なくいつでも礼拝することができるのです。

「神は霊である」とは、神は空間や時間の制約をまったく受けないということです。もし、神が肉体を持っているなら、そこに行かなければなりません。しかし、神は霊ですから、特定の場所に行かなければ礼拝にならないということはない、と、イエス様はサマリヤの女性にお教えになりました。

私たちの世界は空間と時間に支配されているため、「どの時間にどこで礼拝するか」が重要になります。この世界では他の空間に同時に存在することはできないし、時間の外に出ることもできません。しかし、神は霊ですから、いつでもどこでも神様を求めることができるのです。ですから、いつでも私たちは神様に礼拝すべきです。そういう時代が来るとイエス様は教えておられます。

■真の礼拝

「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。」(ルカ 18:1)

イエス様が教えておられる真の礼拝とは、次のようなものです。

「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるる者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」(ルカ 18:10-14)

もし、何の先入観もなくこのパリサイ人と出会ったら、「立派なクリスチャンだなあ」と思うことでしょう。しかし、イエス様が真の礼拝者と認めたのは取税人のほうです。取税人は、自分を低くして神に助けを求めました。これが礼拝なのです。しかし、パリサイ人のほうは、自分は立派なことができたからほめてください、と礼拝しています。これは礼拝ではありません。

私たちが捧げている礼拝はどうでしょうか。神様にほめてもらいたくて礼拝したり、奉仕したりしていないでしょうか。それは、自分を主役にした礼拝です。「私は立派なクリスチャンになりました！」と自分の生き方を報告するのは礼拝ではありません。そうではなく、神に助けを請い、神が主役である礼拝こそ、真の礼拝です。

■御霊と真理による礼拝

「しかし、まことの礼拝者たちが御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちを礼拝者として求めておられるのです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」

(ヨハネ 4:23-24 新改訳聖書 2017)

最新の新改訳聖書 2017 では、それまでの「霊とまこと」が「御霊と真理」という訳に変わりました。ギリシャ語の原文では「霊」ですが、この霊は御霊を指すことが明らかなので、解釈が入って「御霊」と訳されたのです。この言葉は、そもそも「しかし、わたしが与える

水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます」(ヨハネ 4:14) という話の続きで語られています。イエス・キリストが与える水とは、永遠のいのちのことです。それは、御霊であり、キリストのからだであり、霊のからだであり、イエス・キリストを知ることです。真理とは御言葉を指します。つまり、「御霊と真理による礼拝」とは、「イエス・キリストと御言葉による礼拝」です。

人は自分がほめられて肉を満足させる礼拝を求め、礼拝が社交場となり、自分をアピールする場になっていました。しかし、私たちはすでに御霊を受け、永遠のいのちを受けとったのです。ですから、これからは、自分が主役となる礼拝ではなく、神からいただいた永遠のいのちを豊かにする礼拝をささげなさいと、イエス様は語られたのです。御霊による礼拝とは、イエス・キリストとの関係をさらに深め、友と呼ばれる関係を築く礼拝です。それが、人ではなく神を主役とする礼拝です。イエス様と私たちは、主従関係ではなく友の関係です。イエス様との交わりが始まったので、その交わりを豊かにする、そういう礼拝をする時が来たと言われているのです。

「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」(ヨハネ 10:10)

神が私たちにお与えになったいのちとはイエス・キリストです。イエス・キリストは私たちにいのちを与え、それを豊かにするためにこの地上に来られました。イエス・キリストは真理でありいのちです。

そもそも神が人を造った目的は、主人と奴隷の関係を築くためではなく、友となるためです。三位一体の神はひとつの関係です。その父と子と聖霊の輪を広げるために人を造ったのです。ですから、神への信頼を増し加えて友としての関係を築いていくことが、礼拝なのです。それは具体的には、神の前にへりくだって御言葉を聞くという態度になりますが、その目的は、私たちがイエス様を知り、友としての関係を深めることです。

■神はどのような方か

1. 時間に制約されない

「霊である」とは、神は時間に制約されないということです。

「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」(ヘブル 13:8)

聖書は、「神はいつまでも変わらない」と教えています。これが「永遠」です。「永遠」とは、時間が長く続くことではなく、いつまでも変わらないということです。ということは、イエス・キリストが十字架にかかったのは、2000年前でなく、今の話だということになります。イエス様からすると、今、あなたのために十字架にかかっているのであり、今「私はあ

なたを愛している」と語りかけておられるのです。

「ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。」（ヘブル 13:12-13）

イエス様が苦しみを受けられたのは、私たちにとっては 2000 年前の出来事ですが、イエス様にとっては今の話です。イエス様は、今、あなたのために苦しみを受けておられるのだから、あなたも宿営の外に出て、みもとにいらっしやいと招かれているのです。

宿営とは、砂漠で過ごす安全な場所を指しています。私たちが地上で安心を得ようとするよりどころは、人から良く思われることや富を得ることなどです。それらを捨てて主のみもとに行くこと、これが御霊による礼拝です。神があなたの盾となって守ってくださるから、自分を主役とするのではなく、神を中心にし、神を見て安心するのが礼拝なのです。

本当の礼拝とは、あなたのよりどころを、見える安心からキリストによる安心に変えることです。礼拝とは、形式ではなく真の平安を得ることなのです。

2. 空間に制約されない

神は霊であることの 2 番目の意味は、空間に制約されないということです。

「キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。その霊において、キリストは捕われの霊たちのところに行ってみことばを宣べられたのです。昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです。わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通して救われたのです。」（I ペテロ 3:18-20）

空間に制約されないとは、どこにでも行って福音を語るができるということです。ですから、イエス・キリストの十字架の贖いは現代にも適用され、ノアの時代、アダムの時代にも適用されるのです。神がいつでもどこでも語りかけてくださいます。人は、神が語りかけてくださったことによって、応答して救われました。人ができることは、救われた人にもみことばを伝えて、その人が救いを自覚できるようにすることです。私たちが人を救うのではなく、神が人を救い、私たちが収穫をするということです。神がいつでもどこでも語りかけてくださるので、私たちはいつでもどこでも礼拝することができるのです。

「ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」
（I ペテロ 5:6-7）

神様から永遠のいのちをいただき、イエス・キリストを知る信仰を頂いたのですから、その関係を深めて友としての関係を築くことが「御霊と真理による礼拝」です。それは、いつも神がおられることを忘れないで、へりくだり、一切の思い煩いを告白し、神によってすべてひきあげていただくことです。

「あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」(I ペテロ 5:10)

私たちはすでに神に招き入れられ、永遠のいのちをいただき、御霊をいただきました。私たちが苦難を通っても、神は責任を持って堅く立たせて強くし不動のものとしてくださいます。このことを信じて生きていく関係を神と築くことが、友としての関係を築くことであり、永遠のいのちを豊かにすることです。これが礼拝なのです。

礼拝とは形式を守るのではなく、神への信頼を増し加えることです。困ったときにはいつでも神に祈り、あきらめないで祈り続けましょう。それが神を礼拝することの本質です。そういう礼拝をする時が来た、とイエス様は言われました。

ただ形式的に伝統を守ればクリスチャンという時代は終わりました。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」つまり、イエス・キリストへの信頼を増し加えていく礼拝をする時が来たということです。

友なる神にいつでも祈り、神への信頼を増し加えることを目指して生きていきましょう。